

権威に弱い国民

E・O・ライシャワー『日本《過去と未来》』（時事通信社、一九六七年）より

当時の日本において、国家主義的かつ権威主義的な反動が起こったことの裏には、当然ながら、数世紀にわたって形成された日本人のある特質があった。ナショナリズムはつねにくすぶりつづけており、さしてあおり立てずともそれは再び大きく燃え上がったし、幾百年もの武家政治の下にあった日本人は、軍国主義者の主導権主張を唯々としてうけ入れた。幾世紀もの間の権威政治におとなしく服していたせいでも、たいていの日本人は、再び権威政治を押しつけられることになってもほとんど無関心であった。事実、彼らの多くは、せっかく手に入れた知的・政治的自由に、ぎごちなさを感じて、むしろもう一度天下りの権威のもとで感情的な安住を得たい、とさえ考えていたのであった。封建時代から引きつづき残っていた、このような根強い性質が影響したのでなければ、一九三〇年代のあの反動は起こり得べくもなかったろう。しかし、反動そのものが封建政治への復帰という形をとったわけではない。高度に近代化した工業国が、そのような形で過去に逆戻りすることはあり得なかった。日本が選んだのは、かつて西洋のいくつかの国が進んだ道であった。すなわち、それらの国々では、日本におけると同様、過去の権威政治の精神的遺産が工業化された現代までその息吹きをつづけ、さらに工業化された現代にまで溶けこみ、ファシズムであれ共産主義であれ、全体主義の無差別奴隷社会を創り出していたのである。

このように、近代日本の全体主義政治は、ただ単に過去の權威政治のひこばえであつただけでなく、日本の近代的政治・經濟機構における中央集權的力が生みだしたものであつた。一九二〇年代の民主主義的議會政治の政府が、往時の藩主も將軍も、あるいは天皇さえもなしえなかつた大きな統制力を國民生活全般にわたつて行使しえたのは、近代的報道傳達機關と、政治・經濟において近代的組織がもつ技術に負うものであつた。普通教育の充實、新聞・ラジオの發達普及、そしていうまでもなく國民皆兵制度——これらのものによつて、政權の座にあつたものは、以前には夢想だにできなかった大きな統制力を、國民の思想に対して行使しえたのである。自由主義的な諸理念や民主主義的な諸制度が、明治以來の近代化の歩みから自然に芽ばえたひこばえであつたように、たしかに全体主義的な諸様相も、同じくその近代化の歩みから自然に芽ばえたひこばえであつた。近代化の歩みから生まれたこの對照的な二つが成熟するのにはそれぞれ時間がかつたが、その両方とも、あの明治維新という統御された革命からほとんど同時に生まれ出たものなのであつた。

このように解釈するとき、從來まつたく相桔抗するものと考えられてきた左右二つの勢力が、奇妙にまざり合つているこの日本の現象は、さらに新たな不気味な意味を帯びてくる。平等主義的理想や科學知識が、ヨーロッパの比較的後進的な諸國において全体主義的に悪用されている現象には、ここ数十年來われわれはすっかりなじみになつてゐる。だが、この怖るべき現象がアジアにも起こり得ることをはじめて如実に示したのが、ほかならぬアジア第一の先進國日本であつたのである。

こうした不穏な傾向は、一九二〇年代にゆつくりとほとんど気づかれずに成長し、やがて一九三〇年代に入るや、陸海軍青年将校その他反動諸勢力の推進する急進的な軍国主義、狂信的なナショナリズム、反自由・反民主主義的な偏狭思想が突如として世をおおい、それに先立つ十年同の支配的な思潮はまたたく間にくつがえされてしまったのである。明治の寡頭政治について日本の政治を担当したのは、官僚、財界人、政党政治家の提携によって推進され、都市中産階級によってかなり積極的に支持された議会政治であった。だが今やその議会政治は、国粋主義団体の騒ましい支援と地方住民の無言の支持をうけた軍国主義者たちによって押しのけられたのである。



ライシャワー (O.E. Reichauer 一九一〇～一九七〇)

アメリカの歴史学者。宣教師の子として生れ、十六歳まで日本で過ごした。一九三一年オバリン大学を卒業し、三二年日本および中国の歴史と文化を研究してハーバード大学で修士号を取得。三三～三八年パリ、日本などに留学。三九年慈覚大師円仁の研究でハーバード大学から博士号を取得。同大学で教鞭をとる。戦後、六一～六六年日本駐在大使となり、学者大使として日米親善に貢献した。